歌集

野の花香りて

岩下光廣

歌集

野の花香りて

岩下光廣

短歌新聞社

著者略歴

1951年　長野県生れ
長野県小県東部高等学校卒業
公務員

歌集　野の花香りて

昭和56年4月10日発行

著者　岩下光廣
〒389-04　長野県北佐久郡北御牧村羽毛山361

発行者　石黒清介

印刷所　白馬印刷

発行所　短歌新聞社
〒166　東京都杉並区高円寺南4-43-9
電話　03(312)9185番
振替口座東京　5-21683番

定価 1500円

自序

私は高校生の時、ちょっとした事がきっかけで短歌を作り始めました。それ以来四季折々の自然を、美しく可憐な野に咲く花を、儘ならぬ我が身を、そして平凡な毎日の生活を三十一文字に表わして十年になります。初めは捨て去ろうとしていた古いノートの残りの部分に、歌ができる度に書き記し、やがてこのノートも終り新しいノートに変わり、現在歌数が約四百首になりました。

これ等の歌をみるといずれもその一つ一つが思い出深く、我が青春の足跡であり、私の命のかけらでもあります。歌の数は決して多くはなく、また歌そのものも洗練されたものとは言えませんが、我が青春の記念碑として、かねてより憧れの自費出版をすることにな

りました。

私は短歌について、特に書物で学んだり、先生に就いたりしたことはなく、ただ古今の作品を鑑賞した程度ですので、全くの自己流でしかありません。歌は作るものではなく、生れるものだと言われますが、私の場合、自然の事物や生活の中で感じた事を即歌にするということは少なく、ある程度後になってそれを歌にしています。また歌は口語よりも文語を使用した方が格調味が出ますが、私は一九〇〇年代の後半に生きる人間として、可能な限り口語を使用するようにしています。更に歌は一般に、五、七、五、七、七を一行に表わしていますが、この場合どこで区切れるのかが解らず鑑賞に時間がかかることが良くあります。そこで邪道と言われるかもしれませんが、五、七、五、七、七をそれぞれ五行に表わすことにしています。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

これ等を含め作品の全てについて、専門家の皆さん始め多くの方方から様々な批判が有ろうかと思いますが、私はそれ等を謙虚に受け止め、今後の土台として行きたいと思います。この歌集を一人でも多くの皆さんに読んで頂くことができれば幸です。

最後に出版に当り、御指導頂いた先生方に深く感謝すると共に、今後におきましても御指導頂けますようお願い申し上げます。

（一九八〇年十一月）

著　者

歌集

野の花香りて

我が望み
野花に誓い
夕暮れの
草の小道を
我は辿る

野の花は
道行く我を
引き止めて
一輪手にさせ
匂いをかませ

美しく
野に咲く花は
うらやまし
ただ安らかで
悩みを知らず

我が心
野花に引かれ
野が恋し
野花を見つけ
ひざまずく

美しく
なでしこの咲く
山すそに
寄りて手を引く
もったいなさに

何故に
咲いて散るのか
野の花は
人に見られず
匂い届けず

月見草
我が悲しみを
聞いてくれ
おまえ無くして
話すもの無し

土手に咲く
野花は我を
笑うのか
こんなに嘆く
我を見ながら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

悲しみを
宵待草に
打ち明けて
別れて辿る
夕暮れの道

花々は
散ったと思い
来て見れば
今は盛りで
一人喜び

川べりに
清らかに咲く
月見草
夕やみ迫り
更に美し

雨降ると
思い傘持ち
登校し
帰りに晴れる
傘の重たさ

蒸し暑く
雨が降りそな
曇り空
早くも群れて
赤とんぼ飛ぶ

ひっそりと
美しく咲く
秋の花
思えば恋し
あの野あの坂

名も知らぬ
姿も知らぬ
秋虫が
草むらで鳴く
秋の夕暮れ

夕暮れを
鳴いて知らせる
こおろぎは
今宵も鳴いて
夕やみ迫り

秋の花
小さいけれど
美しく
我が身我が目を
引かずにおかず

しとしとと
雨の降る夜
草むらで
こおろぎは鳴く
とぎれとぎれに

霧雨が
舞う秋の朝
登校す
何も思わぬ
すがすがしさ

久しぶり
見る建物は
懐かしく
色あせ古び
面影残す

何年も
共に通いし
あの友の
あの手あの足
思い出される

年一度
薬届ける
薬屋は
大きくなりし
我に驚く

卒業し
何年もたつ
古校舎
見知らぬ顔の
後輩は通う

何をする
訳ではないが
すぐに去る
チャイムの響く
校舎の中を

あの暑さ
あのせみの声
今は無く
すすきを揺する
風あるばかり

千曲川
岸辺の花を
夕焼けを
映して流れ
一日終る

変り行く
四季を映して
千曲川
音を立てつつ
今日も流れる

青々と
若葉を思わす
柿の葉の
間に見える
柿は色付く

庭に咲く
白菊の花
美しく
青葉を背にし
更に美し

穏やかな
春を思わす
秋の昼
遠くの山は
ややも色付く

校舎より
遠くに見える
けやきの木
色付き目立つ
我が宮の木なり

早々と
去年と同じ
桜の木
葉は赤らかと
一際目立つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.